

長岡京跡・羽束師遺跡

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡・羽束師遺跡

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、神川中学校増築に伴う長岡京跡・羽束師遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

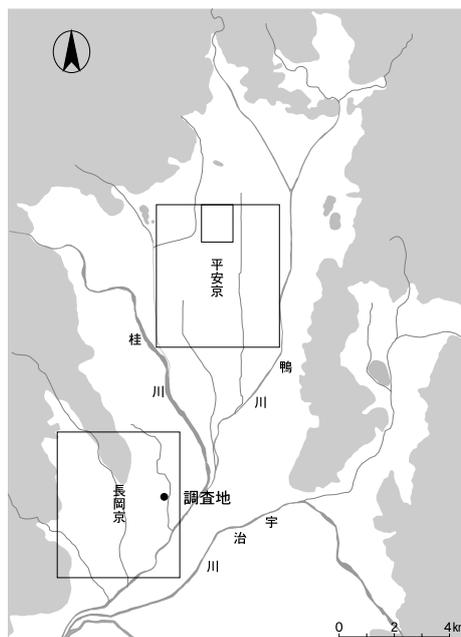
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京跡・羽束師遺跡
- 2 調査所在地 京都市伏見区羽束師菱川 741 神川中学校
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2010年12月27日～2011年3月11日
- 5 調査面積 530 m²
- 6 調査担当者 小松武彦・近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「羽束師」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 土器・土製品、木製品ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 小松武彦
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 構	4
(1) 層序	4
(2) 遺構	4
3. 遺 物	12
(1) 古墳時代の土器	12
(2) 長岡京期の土器	12
(3) 平安時代の土器	15
(4) 土製品	15
(5) 木製品	15
(6) 自然遺物	17
4. ま と め	18

図 版 目 次

図版 1	遺 構	1	第 1 面全景 (北東から)
		2	溝 47 (東から)
図版 2	遺 構	1	第 2 面全景 (北東から)
		2	建物 1 (北から)
図版 3	遺 構	1	建物 2 (東から)
		2	建物 1 柱穴 103 (南西から)
		3	建物 1 柱穴 105 (東から)
		4	建物 1 柱穴 107 (東から)
		5	建物 2 柱穴 100 (北から)
図版 4	遺 構	1	第 3 面全景 (北から)
		2	調査区北部足跡検出状況 (北西から)
		3	調査区南部足跡検出状況 (北西から)
図版 5	遺 構	1	第 4 面北部トレンチ全景 (北から)
		2	第 4 面南部トレンチ全景 (西から)
		3	第 4 面中央部トレンチ全景 (南東から)

図版6 遺物 土師器・土製品

図版7 遺物 須恵器・柱根

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査前全景（南から）	3
図4	神川中学校生徒見学風景（北西から）	3
図5	羽束師小学校児童見学風景（東から）	3
図6	現地公開風景（南から）	3
図7	調査区東壁・北壁断面図（1：100）	5
図8	第1・2面遺構平面図（1：250）	6
図9	溝47断面図（1：50）	7
図10	建物1実測図（1：80）	8
図11	建物2実測図（1：80）	9
図12	第3・4面遺構平面図（1：250）	10
図13	畦畔139・140、水口141断面図（1：50）	11
図14	出土土器・土製品実測図（1：4）	13
図15	出土柱根実測図（1：6）	16
図16	出土柱根切片	17
図17	出土種実	17
図18	調査地点および周辺遺構配置図（1：1,200）	19

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	12
表3	出土種実一覧表	17

長岡京跡・羽束師遺跡

1. 調査経過

今回の調査は、京都市立神川中学校校舎増築工事に伴うものである。調査地点は、同中学校敷地内グラウンドの南西側に位置する。

調査地点は、長岡京左京四条四坊四町および弥生時代から古墳時代の集落跡である羽束師遺跡に該当する。この周辺では数回にわたり、調査が実施されている。

調査地北側では、昭和51年度の羽束師小学校・神川中学校敷地内の調査（調査1）¹⁾や平成12年度の神川中学校敷地内の調査（調査4）²⁾で、長岡京期の建物跡・柵・溝・条坊関係遺構・流路・

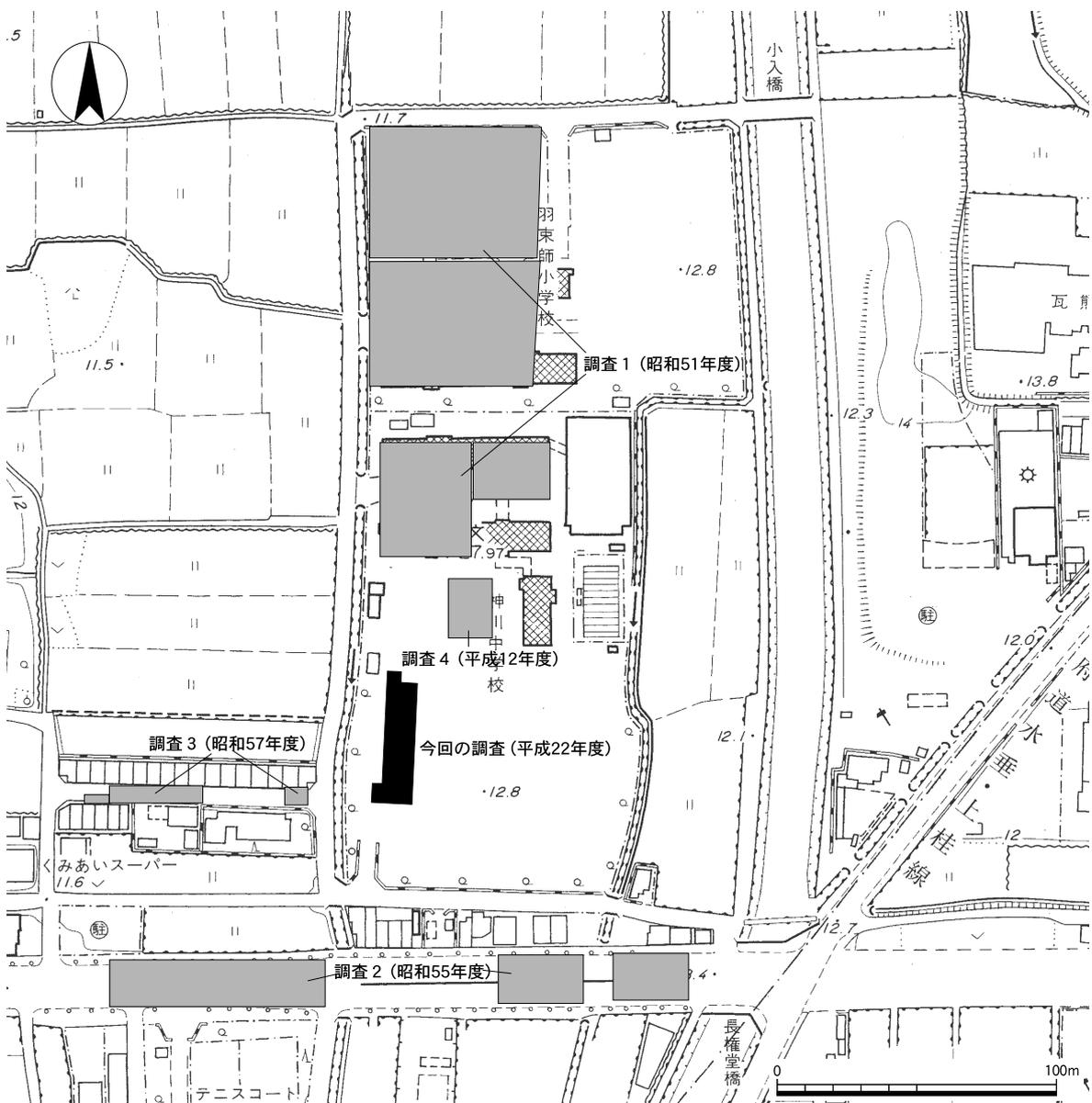


図1 調査位置図 (1 : 2,500)



図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

耕作溝、平安時代の建物跡・流路などが検出されている。南西側では、昭和55年度の外環状線街路に伴う調査³⁾(調査2)や公共下水道工事に伴う調査⁴⁾、昭和57年度の住宅建設に伴う調査⁵⁾(調査3)で、長岡京期の建物跡・井戸跡・柵、条坊関係の溝が検出されている。

羽束師遺跡関連では、南西側の調査2・調査3で弥生時代の竪穴住居跡、古墳時代の流路、飛鳥時代の水田跡が検出されている。

調査は、まず付帯工事から開始し、調査区周辺に残土置場ならびに安全確保のためフェンスを設置した。その後、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「市文化財保護課」という。)の指導の下、調査区を設定した。調査は、重機掘削から開始し、2面の遺構を

対象として調査を進めた。その結果、第1面では、平安時代前期の東西溝、平安時代から中・近世の耕作溝を多数検出した。第2面では、長岡京期の建物2棟・耕作溝を検出した。

当初調査設計では、調査対象面数は上記2面であったが、断面観察の結果、さらに下層で遺構面を確認したことから、市文化財保護課の指導の下、下層遺構の調査を行うこととなった。その結果、第3面では、畦畔や水田跡、そこに残されたヒトや偶蹄目(ウシ)の足跡などを検出した。さらに、下層遺構の確認のため北部・中央部・南部の3箇所にてトレンチを設け下層の調査を続けた。その結果、第4面の遺構面を確認するに至った。第4面では、北部トレンチで古墳時代のヒトや偶蹄目(ウシ)の足跡、中央部トレンチで北西から南西方向の畦畔などの水田跡およびヒトの足跡などを検出した。南部トレンチでは東へ下る落込みを検出した。

なお、長岡京期の建物跡が良好に遺存していたことから、当該遺構の検出時に、主として京都市立羽束師小学校・同神川中学校の児童・生徒を対象に3日間にわたり遺跡見学会を開催した。3日間で小・中学生約800名が見学した。また、地元住民を対象とした現地公開を開催し、約



図3 調査前全景（南から）



図4 神川中学校生徒見学風景（北西から）



図5 羽束師小学校児童見学風景（東から）



図6 現地公開風景（南から）

120名の参加者があった。その後、調査区は排土を重機で埋め戻し、グラウンドの現状復旧を行ったのち、全調査を終了した。

註

- 1) 梅川光隆・平尾政幸『長岡京跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅱ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年
- 2) 出口 勲「長岡左京四条四坊」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 3) 『長岡京跡』京都都市計画道路1等大路第3類第46号外環状線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和55年度（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- 4) 『長岡京跡』桂川右岸流域関連羽束師3号幹線（その1）公共下水工事に伴う長岡左京四条三坊跡発掘調査報告書 昭和55年度（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- 5) 平田 泰『長岡京跡発掘調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年

2. 遺 構

(1) 層序 (図7)

調査区の基本層序は、現地表面からグラウンドの盛土層が厚さ 1.45 ～ 1.65 m、近代の耕作土層が厚さ 0.2 m (第1層)、近世の耕作土・床土層が厚さ 0.15 ～ 0.3 m (第2層)、2.5Y6/8 明黄褐色粘質土層 (第5層) が厚さ 0.2 ～ 0.3 m、7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質土層 (第6層) が厚さ 0.1 ～ 0.2 m、5Y5/3 灰オリーブ色細砂層 (第8層) が厚さ約 0.2 m、5BG5/1 青灰色粘質土層 (第9層) が厚さ 0.2 m 堆積する。今回の調査で確認した土層は第9層までで、第9層下では地山 (無遺物層) は確認していない。第5層上面を第1面、第6層上面を第2面、第8層上面を第3面、第9層上面を第4面として、平面的な調査を行った。

(2) 遺構

検出した遺構には、第1面では平安時代の溝、平安時代から中世の耕作溝、第2面では長岡京期の建物2棟、耕作溝、第3面では奈良時代の水田・畦畔、第4面では古墳時代から長岡京期以前の水田・畦畔・落込みなどがある。

1) 第1面 (図8、図版1-1)

第1面で検出した遺構には、平安時代の東西溝 (溝47)、平安時代から中世の耕作溝などがある。

溝47 (図9、図版1-2) 調査区北寄りで検出した東西方向を示す溝で、東西へは調査区外へさらに延長する。検出長は約9m、幅は2.6m、深さ0.9mで、断面形は肩口から垂直に下がり、中段には平坦面があり、底部中央はU字形を呈する2段落ちの形状である。溝の1段目と2段目の平坦面では径0.1mの小穴を多数検出しており、これらは護岸杭の痕跡と考えられる。埋土は3層に分かれる。上部の2層は砂礫層で、下層は粗砂層が堆積する。出土遺物は長岡京期が主体であるが、平安時代前期のものも少量出土している。したがって、埋没時期は平安時代前期である。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
古墳時代	水田、畦畔、落込み
奈良時代	水田、畦畔
長岡京期	建物、溝、土坑、整地層
平安時代	溝、耕作溝
鎌倉時代～室町時代	耕作溝

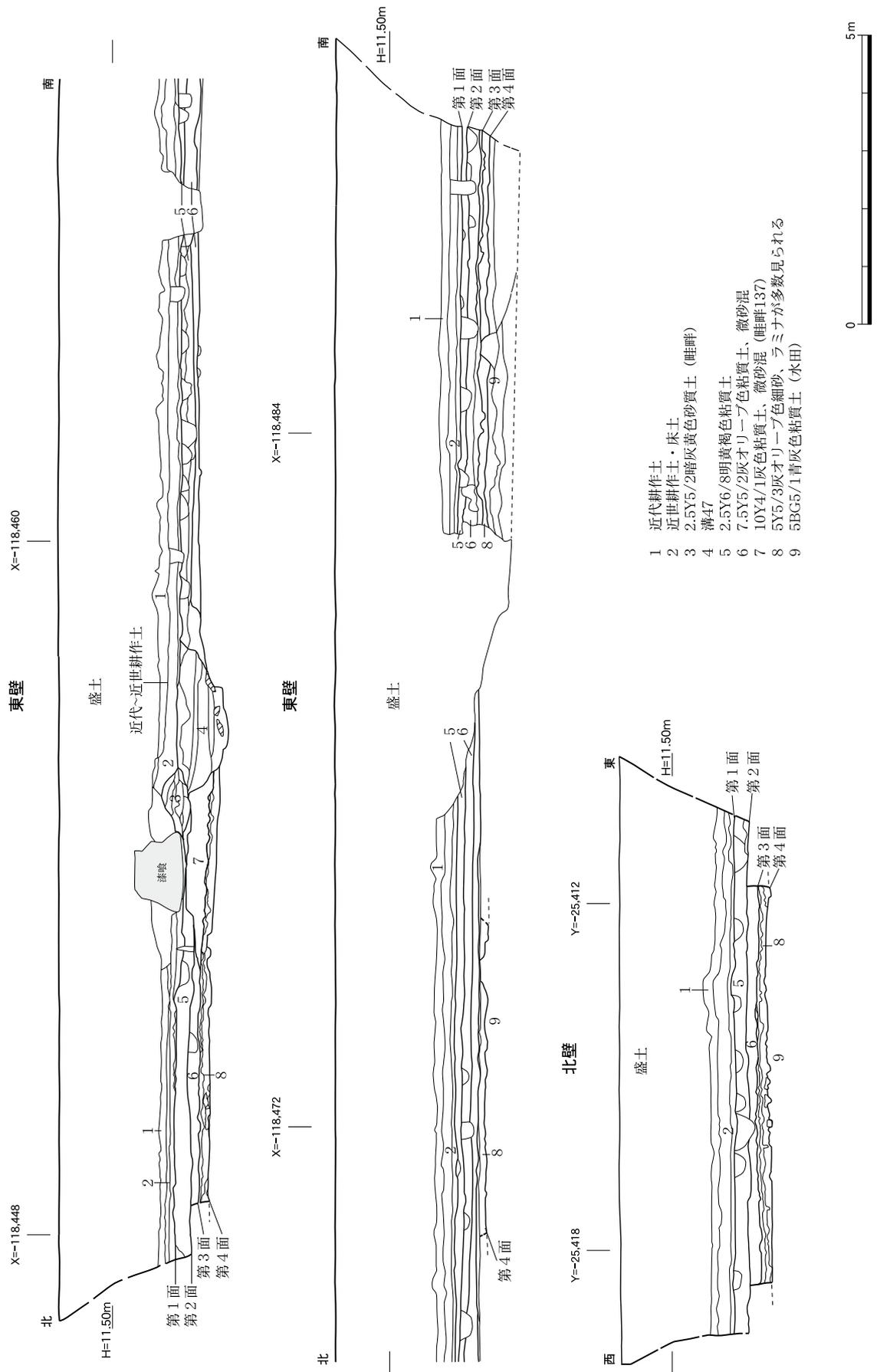


図7 調査区東壁・北壁断面図 (1:100)

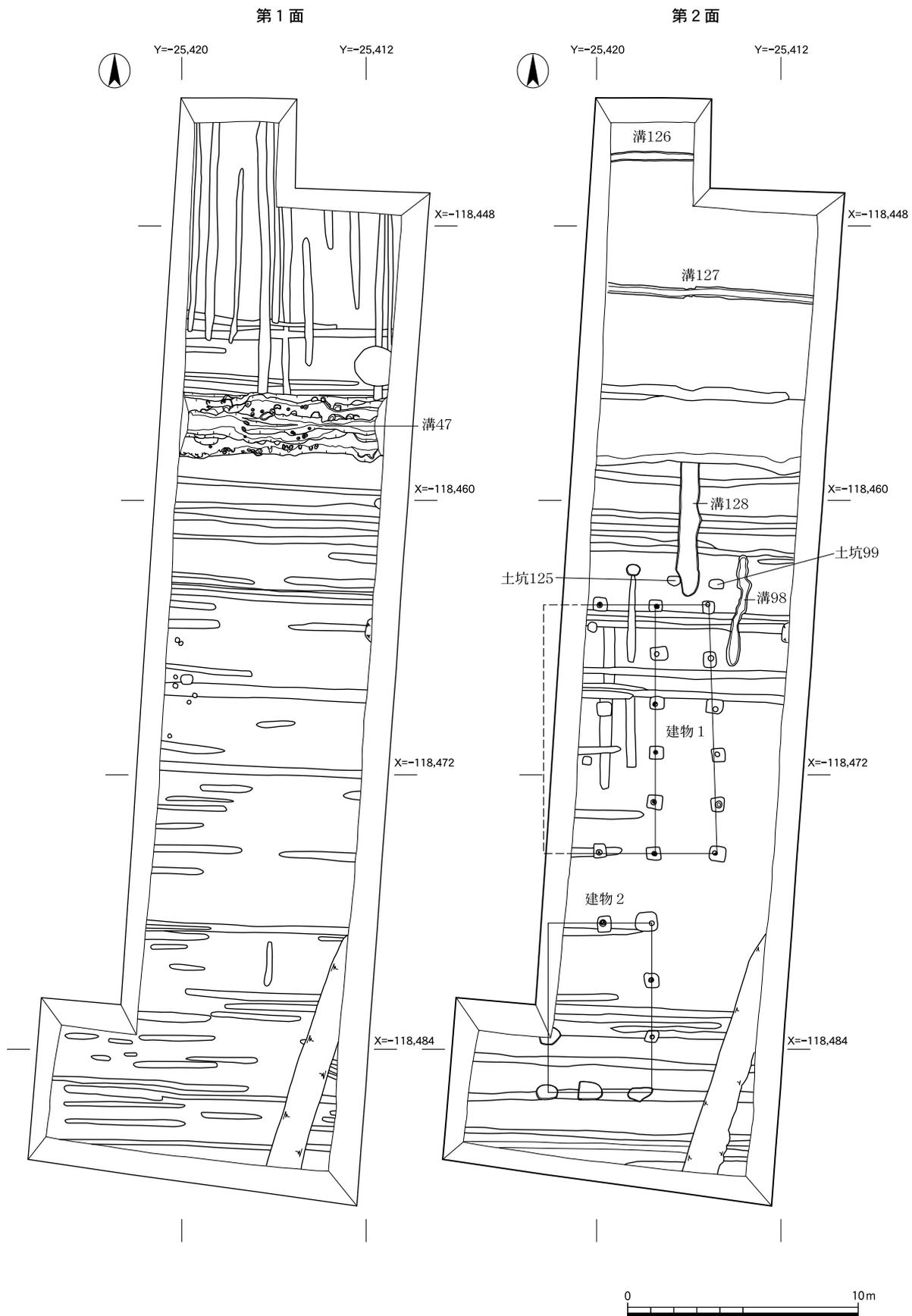


图8 第1·2面遺構平面図 (1:250)

耕作溝 調査区全域で、平安時代から中世の耕作溝と考えられる溝を多数検出した。いずれの溝も調査区外へさらに延長する。前述の溝47を境に、溝の延長方向は概して異なる。溝47以北では南北方向を示す。また、溝47北肩口から北へ約1.8mの間、および南肩口以南では東西方向を示す。検出面での規模は、南北溝は幅0.2～0.3m、東西溝は幅0.05～0.3mある。

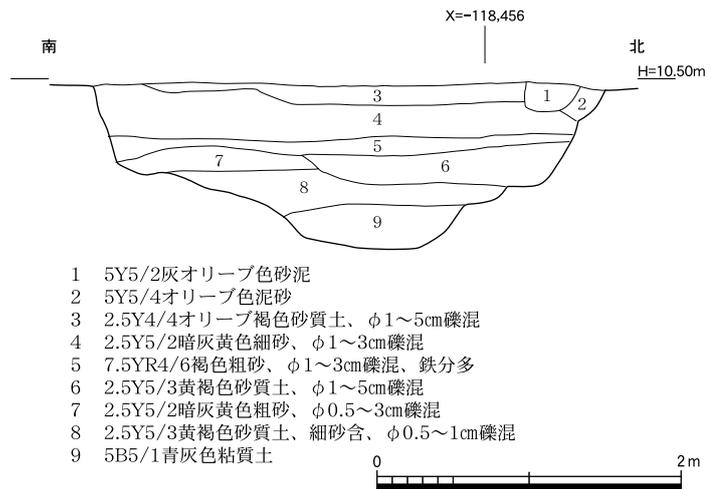


図9 溝47断面図(1:50)

2) 第2面(図8、図版2-1)

第2面で検出した遺構には、長岡京期の掘立柱建物2棟、土坑、耕作溝などがある。

建物1(図10、図版2-2) 調査区中央、溝47の南で検出した南北棟の掘立柱建物である。東西2間、南北5間分を検出した。柱間の規模から、東に庇を有する建物であると考えている。身舎の西側柱筋は調査区外へ広がる。身舎の柱穴の平面形は方形を呈し、一辺0.6～0.8m、深さ0.3～0.6mある。庇部の柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、一辺0.5～0.7m、深さ0.15～0.5mある。身舎の柱間は、梁間2.4m、桁行2.1m、身舎-庇部の柱間は、2.3～2.4mある。身舎の柱穴115を除く8基の柱穴および庇部の柱穴108には柱根が遺存していた(図版3-2～3-4)。遺存状態の良好な柱根は、断面形がいくつかの面取りを施した円形を呈し、径0.11～0.24mある。

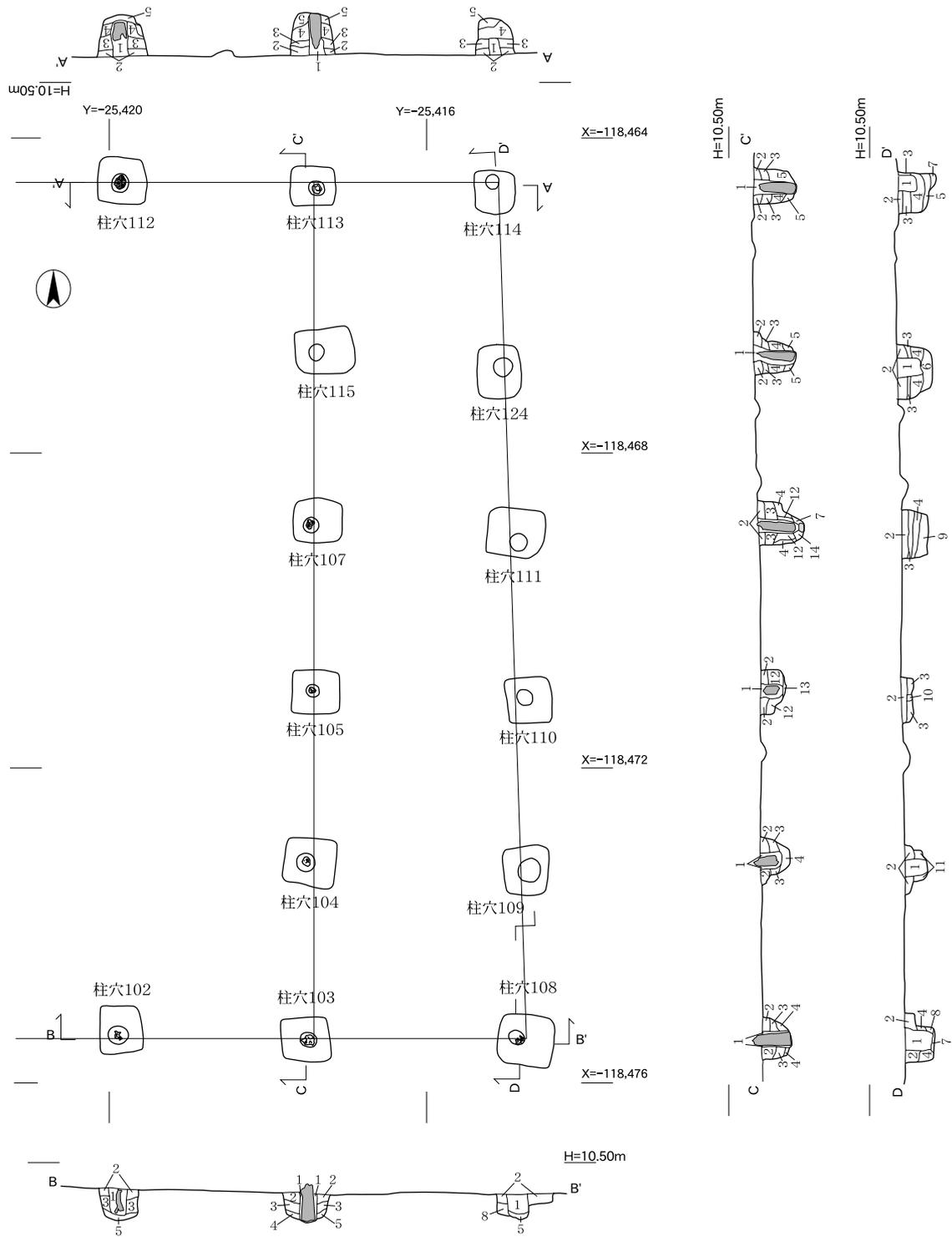
建物2(図11、図版3-1) 建物1の南で検出した南北棟の掘立柱建物で、建物1の身舎東側柱筋と建物2の身舎東側柱筋は、柱筋が通る。建物1の身舎南側柱筋から建物2の身舎北側柱筋までの距離は約2.6mある。身舎の北西部は調査区外へ広がり、梁間2間、桁行3間分を検出した。柱穴の平面形は、方形ないし歪な方形を呈し、一辺0.6～1.0m、深さ0.3～0.4mある。柱間は梁間2.1m、桁行2.4mある。柱穴1基(柱穴100)に柱根が遺存していた(図版3-5)。

土坑99 建物1の北で検出した。掘形の平面形は東西に長い楕円形を呈し、東西0.7m、南北0.5m、深さ0.05mある。埋土はオリーブ黄色砂泥・炭混りで、土錘が出土した。

土坑125 土坑99の西側1.1mで検出した土坑である。掘形の平面形は東西に長い歪な楕円形を呈し、東西0.7m、南北0.5m、深さ0.05mある。埋土はオリーブ黄色砂泥・炭混りである。

溝98 建物1の北東側で検出した南北方向を示す溝である。検出長は4.8m、幅は0.45m、深さは0.1mある。埋土は黄褐色砂泥層で炭が混入する。長岡京期の土器とともに、土錘も出土している。

溝126・127 溝126は溝47の北側で検出した。検出長は3.4m、幅は0.4m、深さは0.1mで、埋土は緑灰色粘質土である。溝127は溝47の北側で検出した。検出長は9.0m、幅は0.45m、



- | | |
|--------------------------------|---|
| 1 7.5GY6/1緑灰色粘質土、微砂混 | 8 10Y4/2オリーブ灰色細砂、微砂混、10Y5/1灰色粘質土含 |
| 2 10Y5/1灰色砂質土、10YR4/6褐色粘質土、鉄分多 | 9 10Y4/2オリーブ灰色細砂、微砂混、10Y5/1灰色粘質土含、ラミナ混 |
| 3 5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土、微砂混 | 10 10Y5/1灰色粘質土、10Y4/2オリーブ灰色細砂ブロック状に混 |
| 4 5GY5/1オリーブ灰色粘質土、細砂・微砂混 | 11 7.5GY6/1緑灰色粘質土、微砂混 |
| 5 7.5GY5/1緑灰色粘質土 | 12 10Y5/1灰色砂質土、炭少量含 |
| 6 5GY5/1オリーブ灰色粘質土、細砂混 | 13 7.5Y5/1灰色粘質土、シルト含、炭混 |
| 7 5PB3/1暗青灰色粘質土、植物遺体含 | 14 7.5Y5/1+4/1灰色、4/2灰オリーブ色粘質土、細砂・微砂混、炭含 |



図10 建物1実測図 (1:80)

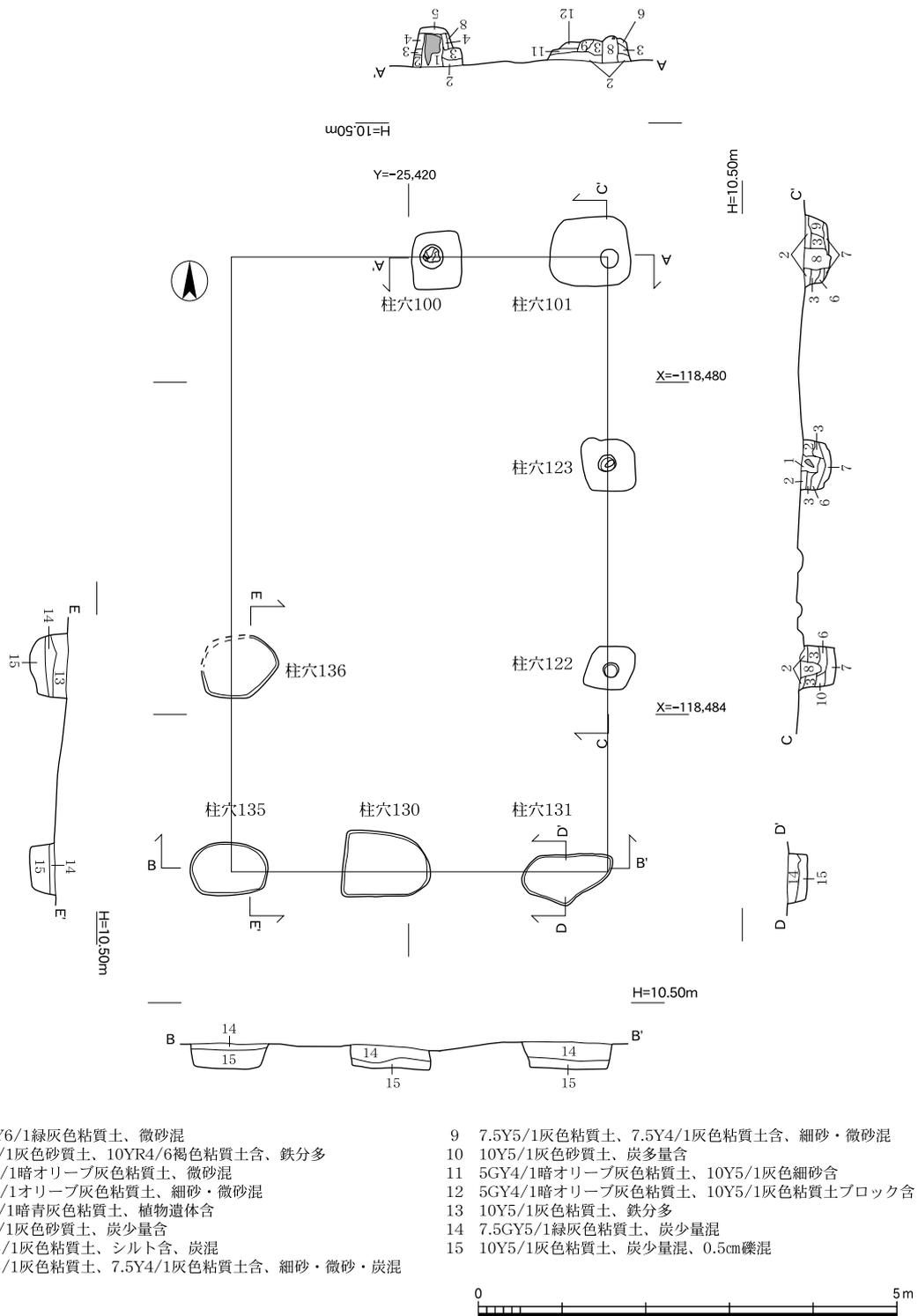


図 11 建物 2 実測図 (1 : 80)

深さは 0.1m で、埋土は灰色粘質土である。溝 126・127 とともに堆積土から耕作溝と考えられる。

溝 128 溝 47 の南側で検出した南北方向を示す溝である。検出長は 5.8 m、幅は 0.9 m、深さは 0.05m ある。

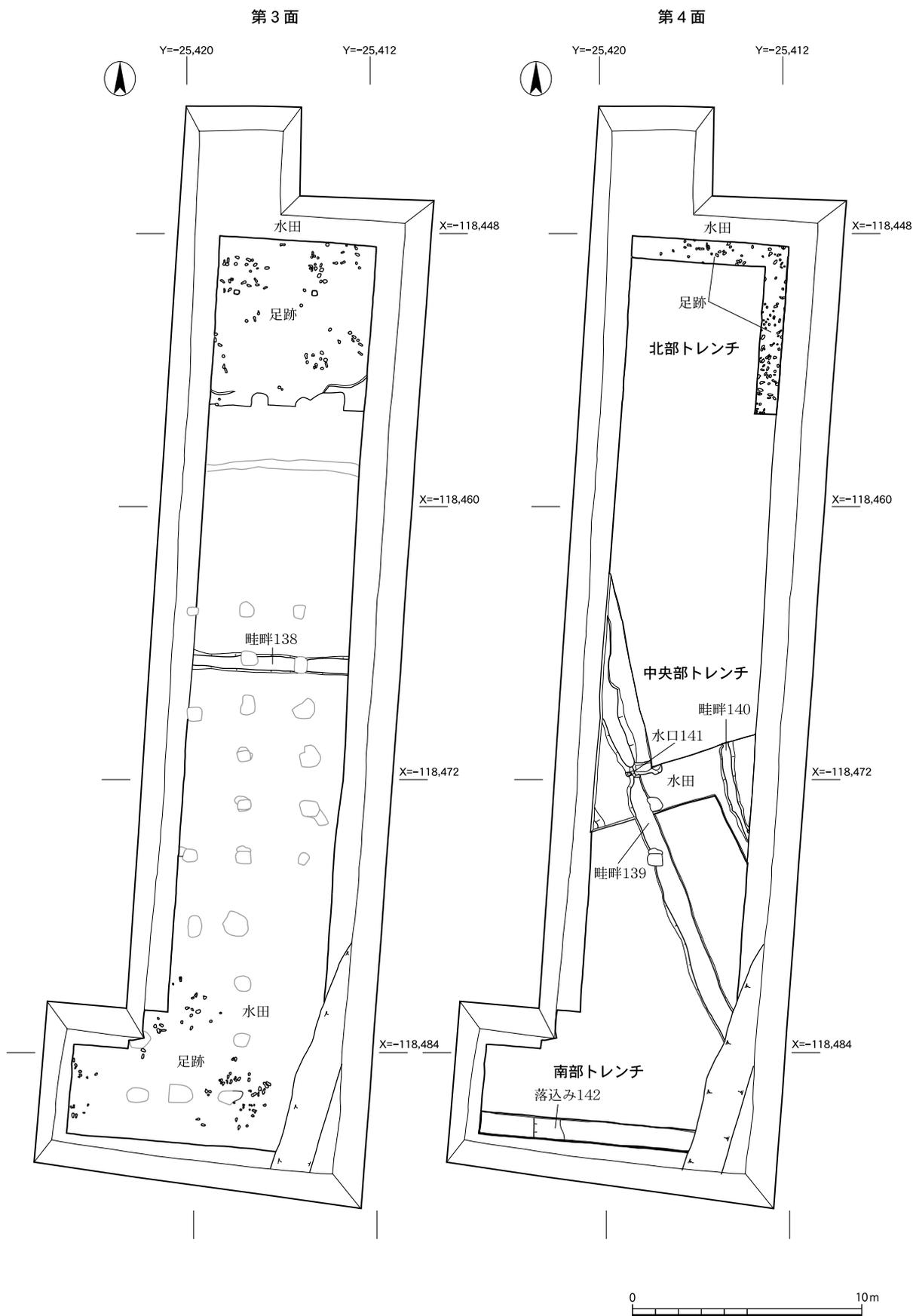


図12 第3・4面遺構平面図 (1:250)

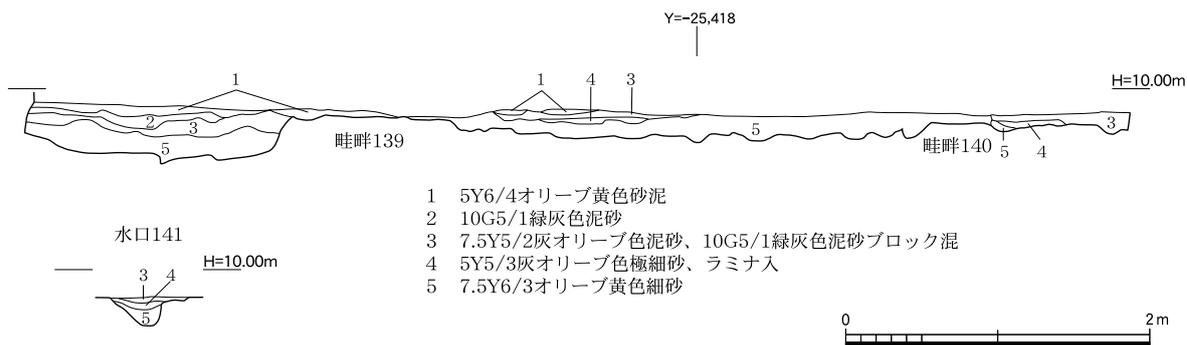


図13 畦畔139・140、水口141断面図（1：50）

3) 第3面（図12、図版4-1）

第3面では、水田・畦畔を検出した。奈良時代頃と考える。

調査区の北側および南西側では、ヒトや偶蹄目（ウシ）の足跡を多数検出した（図版4-2・4-3）。

畦畔138 調査区中央で検出した東西方向畦畔である。検出長は6.8m、幅は0.5～0.6m、残存高0.07mである。この畦畔の付近では足跡は検出していない。

4) 第4面（図12、図版5）

第4面では古墳時代頃の水田・畦畔・落込みなどを検出した。

北部トレンチでは、ほぼ全域で、長さ15～25cm、幅5～10cm大のヒトと考えられる足跡を多数検出した。中央部トレンチでは、畦畔139、水口141、畦畔140を検出した。また、畦畔139と140間では図示していないが、足跡と考えられる窪みを検出している。南部トレンチでは落込み142を検出した。

畦畔139（図13） 中央部トレンチ西側で検出した。北北西－南南東方向を示す。検出長は18.5m、幅は0.5～0.9m、残存高0.1～0.2mある。

畦畔140（図13） 畦畔139の3.5m東で検出した。延長方向は畦畔139とほぼ並行する。検出長は4.6m、幅は0.2～0.4m、残存高0.1mある。

水口141（図13） 畦畔139の北寄りで検出した。長さ0.3m、幅は0.5m、深さは0.2mある。

落込み142 南部トレンチで検出した。西肩口は南北方向を示し、東へ向かって緩やかに傾斜する。検出長は0.9m、深さ0.3mある。南はさらに調査区外に延長する。埋土は灰色粘質土・細砂混りで古墳時代の須恵器が出土した。

3. 遺物

出土遺物は、土器類が遺物整理箱に10箱、木製品が6箱出土した。その内訳は、長岡京期のものが最も多く、平安時代、鎌倉時代、室町時代のものは少量である。古墳時代のものは数点出土した。木製品は長岡京期の建物跡から出土した柱根である。

(1) 古墳時代の土器 (図14、図版7)

(1～3)は須恵器である。1は杯H蓋である。口径14.5cm。天井部から緩やかに湾曲し口縁部にいたる。内外面はヨコナデを行い、天井部と口縁部境には浅い凹みが見られる。外面の天井部付近は未調整である。焼成は良好。落込み142出土。2は甕の口頸部である。口径12.9cm。頸部からやや外反して口縁部は丸くおさめる。口縁部外面には丸みをおびた突帯が巡る。頸部は短い。体部外面にはタタキ、内面には青海波圧痕を施す。焼成はやや不良。第6層出土。3は甕の口頸体部である。口径25.0cm。肩部から屈曲して口縁部にいたる。口縁部外面には凸帯を巡る。頸部内外面ともヨコナデを施す。体部外面には格子タタキ、内面には青海波圧痕成形。焼成は良好。第5層出土。

(2) 長岡京期の土器 (図14、図版6・7)

(4～14)は土師器である。4は杯B蓋である。口径19.4cm。天井部から緩やかに下がり、口縁部を内側に曲げて丸くおさめる。調整痕は不明瞭である。焼成はやや不良。第5層出土。5は皿Cである。口径8.0cm、器高1.0cmの小皿で、底部から直立ぎみに外向し、口縁部はやや外反し丸くおさめる。内面はナデ調整を施す。外面口縁部もナデ調整を施し、底部にはオサエ痕が見られる。焼成は良好。第5層出土。6～9は皿Aである。6は口径15.1cm、器高2.4cm。底部か

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	須恵器	18箱	須恵器3点	10箱	0箱
長岡京期	土師器、須恵器、瓦、土製品、木製品		土師器11点、須恵器18点、土製品5点、柱根7点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器素地		緑釉陶器素地2点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、瓦器	1箱		1箱	0箱
江戸時代	土師器、施釉陶器、金属製品				
合計		19箱	46点(8箱)	11箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

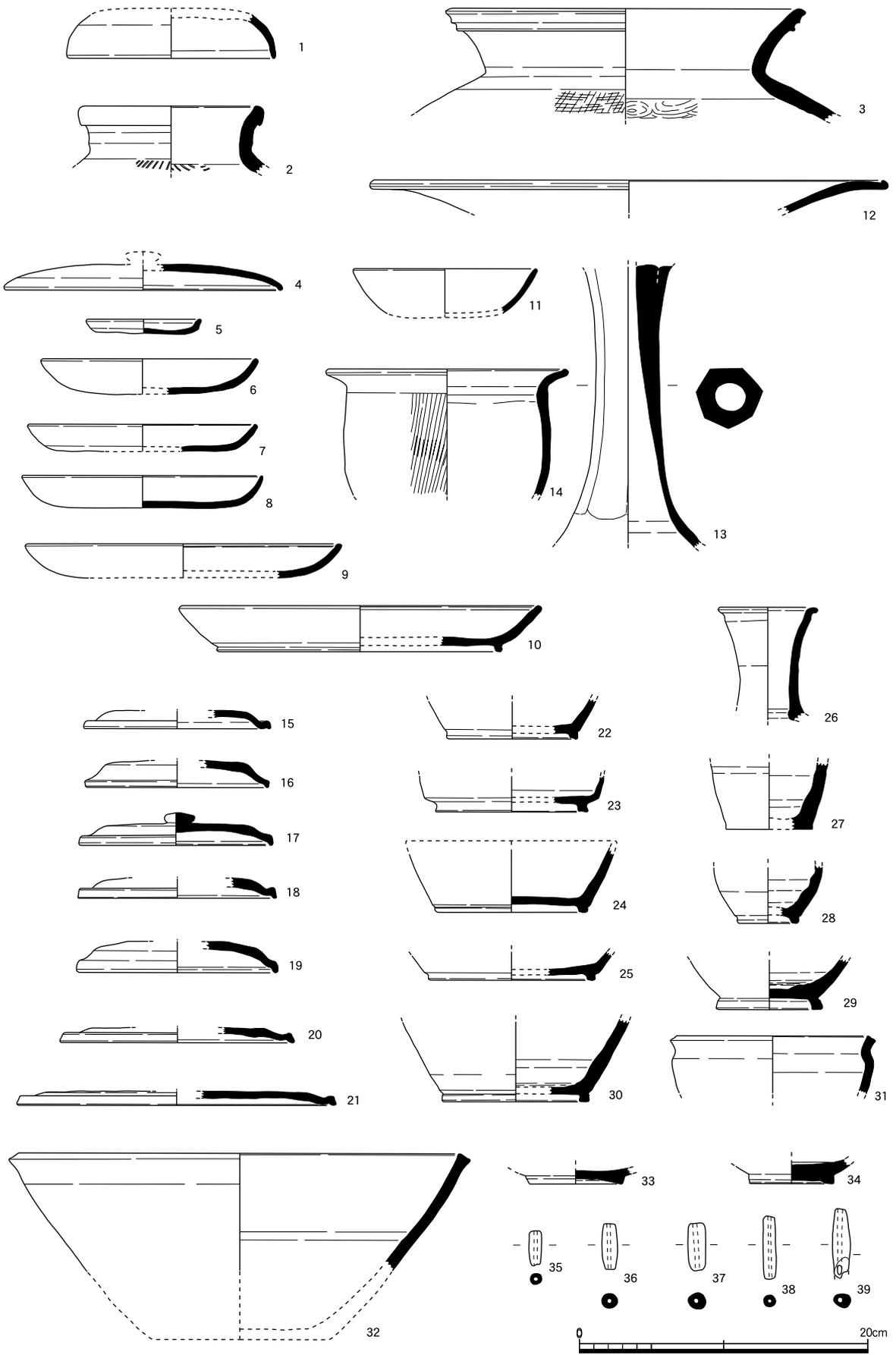


图 14 出土土器・土製品実測図 (1 : 4)

ら内湾しながら外向し、口縁部は丸くおさめる。内面はナデ調整を施す。調整痕は不明瞭である。焼成はやや不良。第5層出土。7は口径16.0 cm、器高1.9 cm。底部からやや直線的に外向し、口縁部は丸くおさめる。内面には強いナデ調整を施しているため凹線が巡る。外面にもナデ調整を施し、底部はヘラケズリ調整を行う。溝98出土。8は口径16.7 cm、器高2.3 cm。底部から内湾ぎみに外向し、口縁部は丸くおさめる。内面はナデ調整を施す。外面はヘラケズリ調整を行う。焼成はやや不良。第5層出土。9は口径22.0 cm、器高2.4 cm。底部から内湾ぎみに外向し、口縁部は丸くおさめる。内面に強いナデ調整を施し、凹線が巡る。外面器表の状態が悪く調整痕は不明瞭ではあるが、ヘラケズリ調整の痕跡が残る。焼成はやや不良。第5層出土。10は皿Bである。口径25.2 cm、器高3.2 cmの大型の皿で、底部から外向し、口縁部は丸くおさめる。内面は強いナデ調整を施すため凹線が巡る。外面器表の残存状態が悪く調整痕は不明瞭である。高台は貼付高台である。焼成は不良。第5層出土。11は椀Aである。口径12.8 cm、器高3.9 cm。底部付近からやや直線的に外向し、口縁部は丸くおさめる。内面はナデ調整を施す。外面はヘラケズリ調整を行う。第5層出土。12は高杯の杯部である。口径36.0 cm。口縁部で外反し、大きく開く。内面はナデ調整を施し、外面にはヘラミガキの調整痕が認められる。第5層出土。13は高杯の脚部である。棒状のものに粘土を巻き付けて成形しており、外面は7面に面取りを施す。器表面の残存状態が悪く調整痕は不明である。焼成はやや不良。第5層出土。14は甕である。口径16.4 cm。体部はやや湾曲しながら立ち上がり、「く」字に外折して口縁部にいたる。体部内面はハケの後に丁寧なナデを施す。頸部の内外面はナデ調整を施す。体部外面はやや粗い縦方向のハケメを施す。口縁部には煤が付着する。焼成は良好。土坑125出土。

(15～32)は須恵器である。15～21は杯Bの蓋である。15は口径13.0 cm。平坦な天井部から傾斜し、口縁部は屈曲し、口縁部にいたる。端部はつまみ丸くおさめる。内外面ともヨコナデを行う。焼成は良好。第5層出土。16は口径12.8 cm。天井部から傾斜して口縁部にいたる。口縁部は下垂し、端部はつまみ丸くおさめる。天井部は未調整で、内外面ともヨコナデを行う。焼成は良好。第5層出土。17は口径13.5 cm、器高2.3 cm。平坦な天井部から緩やかに傾斜して口縁部にいたる。口縁部は下垂し、端部はつまみ丸くおさめる。内外面ともヨコナデを行うが、天井部の中位までは未調整である。扁平な宝珠形をつまみを付ける。焼成は良好。第5層出土。18は口径13.8 cm。平坦な天井部から傾斜し、屈曲して口縁部にいたる。口縁部はやや外へ開いて下垂し、端部はつまみ丸くおさめる。19は口径14.0 cm。平坦な天井部から傾斜し、屈曲して口縁部にいたる。口縁部は下垂し、端部はつまみ丸くおさめる。天井部は未調整で、内面と口縁部はヨコナデを行う。焼成は良好。第5層出土。20は口径16.3 cm。扁平な天井部から屈折して口縁部にいたる。口縁部は下垂し、端部はつまみ丸くおさめる。天井部は未調整で、内外面ともヨコナデを行う。焼成は良好。溝47下層出土。21は口径22.2 cmの大型の蓋である。扁平な天井部から屈折して口縁部にいたる。口縁部は下垂し、端部はつまみ丸くおさめる。焼成は良好。土坑98出土。22～25は杯Bである。22は高台径9.1 cm。高台部から体部は直線的に外傾する。高台は貼付高台である。内外面ともヨコナデを行う。焼成は良好。第5層出土。23は高台径10.5 cm。

高台部から体部は直線的に外傾する。高台は貼付高台である。内外面ともヨコナデを行う。焼成は良好。溝 47 上層出土。24 は底部径 10.7 cm。高台部から直線的に外傾する。高台は貼付高台である。内外面ともヨコナデ、底部は未調整である。焼成は不良。第 5 層出土。25 は底部径 10.6 cm。高台から体部は直線的に外傾する。内面と外面体部はヨコナデを行う。底部は未調整である。焼成は良好。第 5 層出土。26・27 は壺 G である。26 は口縁部の破片で、口径 6.9 cm。口縁部は外傾しつつ立ち上がり、端部は水平方向にやや肥厚する。内外面ともヨコナデを行う。焼成はやや不良。第 5 層出土。27 は底部の破片である。底部は平坦で体部はやや内湾ぎみに立ち上がる。内外面ともヨコナデを行う。底部には糸切り痕を残す。焼成はやや不良。第 5 層出土。28 は壺 M である。高台径 4.2 cm。体部は球形状を呈する。高台は貼付高台である。内外面ともヨコナデを行う。外面に自然釉が掛かる。焼成は良好。第 5 層出土。29・30 は壺 L である。29 は高台径 7.0 cm。体部は球形状を呈する。高台は貼付高台である。内外面ともヨコナデを行う。焼成は良好。第 5 層出土。30 は高台径 10.1 cm。体部は外上方へ直線的に立ち上がる。内外面ともヨコナデを行う。焼成は良好。第 5 層出土。31 は鉢 D である。口径 14.2 cm の小振りの鉢で、体部は外傾して立ち上がる。口縁部は屈曲し、端部は面をもつ。内外面ともヨコナデを行う。焼成は良好。第 1 面検出中出土。32 は鉢である。口径 33.5 cm。体部は直線的に外傾して口縁部にいたり、端部は面をもつ。内外面ともヨコナデを行う。焼成はやや不良。第 5 層出土。

(3) 平安時代の土器 (図 14)

(33・34) は緑釉陶器の須恵器質素地椀である。33 は底部径 6.6 cm。削出蛇の目高台である。内面はヘラミガキを施す。焼成はやや不良。溝 47 上層出土。34 は底部径 5.9 cm。内面はヘラミガキを施す。ロクロは右回転である。いずれも平安時代の遺物である。

(4) 土製品 (図 14、図版 6)

(35～39) は土錘である。ほぼ中心に孔をもつ。断面形は 35・37・38 は筒形、36・39 は長軸中央部に最大径がある。35 は長さ 2.4 cm、径 0.9 cm、重さ 1.5g。36 は長さ 3.2 cm、径 1.0 cm、重さ 3.4g。37 は長さ 3.3 cm、径 1.3 cm、重さ 4.0g。38 は長さ 4.4 cm、径 0.9 cm、重さ 3.4g。39 は一部欠損するが、長さ 4.9 cm、径 1.3 cm、重さ 4.8g。35 は土坑 99、36～39 は土坑 98 出土。

(5) 木製品 (図 15、図版 7)

木製品には第 2 面で検出した建物 1・2 の柱穴から出土した柱根がある。

(木 1) は建物 2 柱穴 100 から出土した。残存長は 38.3 cm、最大幅は 23.2 cm ある。面取りと思われる面が 3 面遺存する。(木 2) は建物 1 柱穴 103 から出土した。残存長は 50.0 cm、最大幅は 15.9 cm ある。(木 3) は建物 1 柱穴 107 から出土した。残存長は 51.6 cm、最大幅は 13.4 cm ある。(木 4) は建物 1 柱穴 104 から出土した。残存長は 23.5 cm ある。(木 5) は建物 1 柱穴 112 から出土した。残存長は 37.7 cm、最大幅は 16.7 cm ある。器面には面取りと思われる面が遺存する。(木 6) は建物

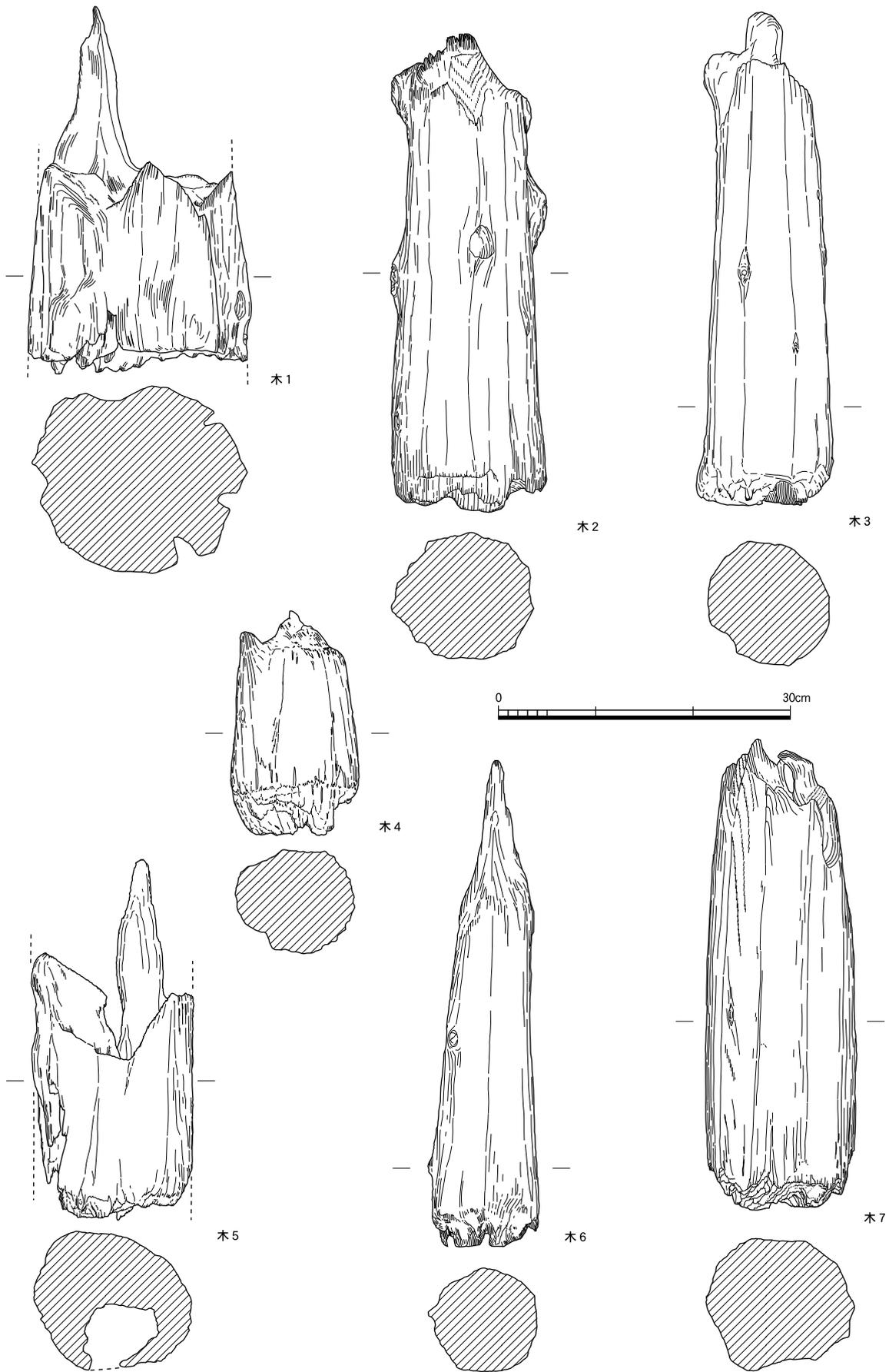


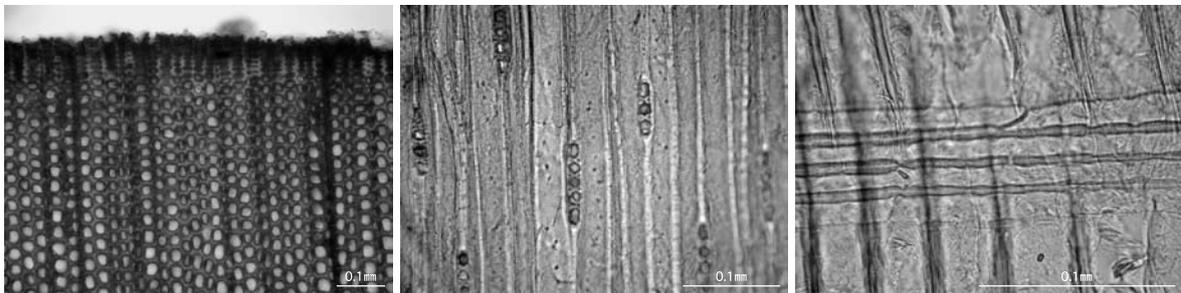
图15 出土柱根实测图（1：6）

1 柱穴 115 から出土した。残存長は 51.0 cm、最大幅は 11.4 cm ある。(木 7) は建物 1 柱穴 113 から出土した。残存長は 49.2 cm、最大幅は 15.7 cm ある。器面には面取りと思われる面が遺存する。

(6) 自然遺物 (図 16・17、表 3)

第 2 面で検出した長岡京期の建物 1・2 から出土した 9 点の柱根について樹種同定を行った。その結果、すべての柱根がヒノキ材であることが判明した。

また、第 4 面の北部トレンチで検出した水田 (図 7 の第 9 層) の土のサンプルを約 470 cm³ 採取し、種実分析を行った。分析の結果、タデ科果実タデ、ミズアオイ種子ミズアオイ、オモダカ科種子オモダカ、ホタルイ属果実カヤツリグサなどを検出した。これらの種実類は水辺・湿地・水田・沼・溝・道端などに生息する植物で、分析結果から調査成果を裏付けるものである。

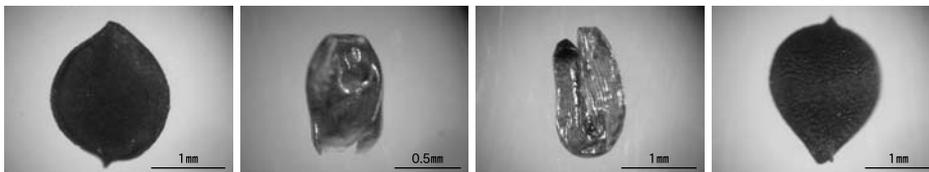


ヒノキ木口

ヒノキ板目

ヒノキ柁目

図 16 出土柱根切片



タデ科果実

ミズアオイ種子

オモダカ科種子

ホタルイ属果実

図 17 出土種実

表 3 出土種実一覧表

和名	部位	科名	北東部断割 (第 9 層)	生育場所
タデ科	果実	タデ	1	水辺・湿地・道端
ミズアオイ	種子	ミズアオイ	1	水田・沼
オモダカ科	種子	オモダカ	1	水田・溝
ホタルイ属	果実	カヤツリグサ	23	水田・溝・湿地

サンプリング量：約 470cm³

4. ま と め

今回の調査成果としては、第1・2面で平安時代から長岡京期の遺構、および第3・4面では奈良時代から古墳時代に属すると考えられる遺構を検出することができたことがあげられる。

長岡京期の遺構は、四町域のほぼ中央部で建物1・2および建物の北側で溝47を検出した。溝47の北側では、今回調査でも建物などは未検出であり、耕作に関連すると考えられる溝を検出したにとどまる。したがって、溝47は四町内を南北に分ける区画溝と考えられる。この遺構分布状況は、昭和51年度調査（調査1）や平成12年度調査（調査4）と同様であり、当該期には四町域北半は宅地として利用されていなかったことが明らかになった。今回出土した遺物の大半は長岡京期に属し、出土した層位は長岡京期の遺構上面に堆積する第5層である。新しい混入遺物も含まれておらず、宅地廃絶後、間をおかず耕作地化したことが窺われる。

一方、溝47の南側では、建物1・2を検出した。四町南西部の昭和57年度調査（調査3）でも建物や柵などが検出されており、四町域南半は居住域として利用されていたものと考えられる。この状況は三・四町域にまたがる昭和51年度調査（調査1）や左京六・七条三坊の平成2年度調査¹⁾の調査結果でも一町内の土地利用の違いが確認されている。今回の調査成果は、長岡京左京の当該地域における土地利用を明らかにできた事例を付加したと言えよう。

第4面で検出した古墳時代の水田跡は、調査地南側の昭和55年度調査（調査2）でも検出され、この地域における検出例としては2例目となる。この調査2で検出された畦畔の方向も今回検出した畦畔139・140と同一方向であることが判明した。さらに、平成2年度調査でも、同方向の畦畔が検出されており、桂川右岸域の水田遺構を考察する上で新たな資料を付加することができた。

註

- 1) 『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年

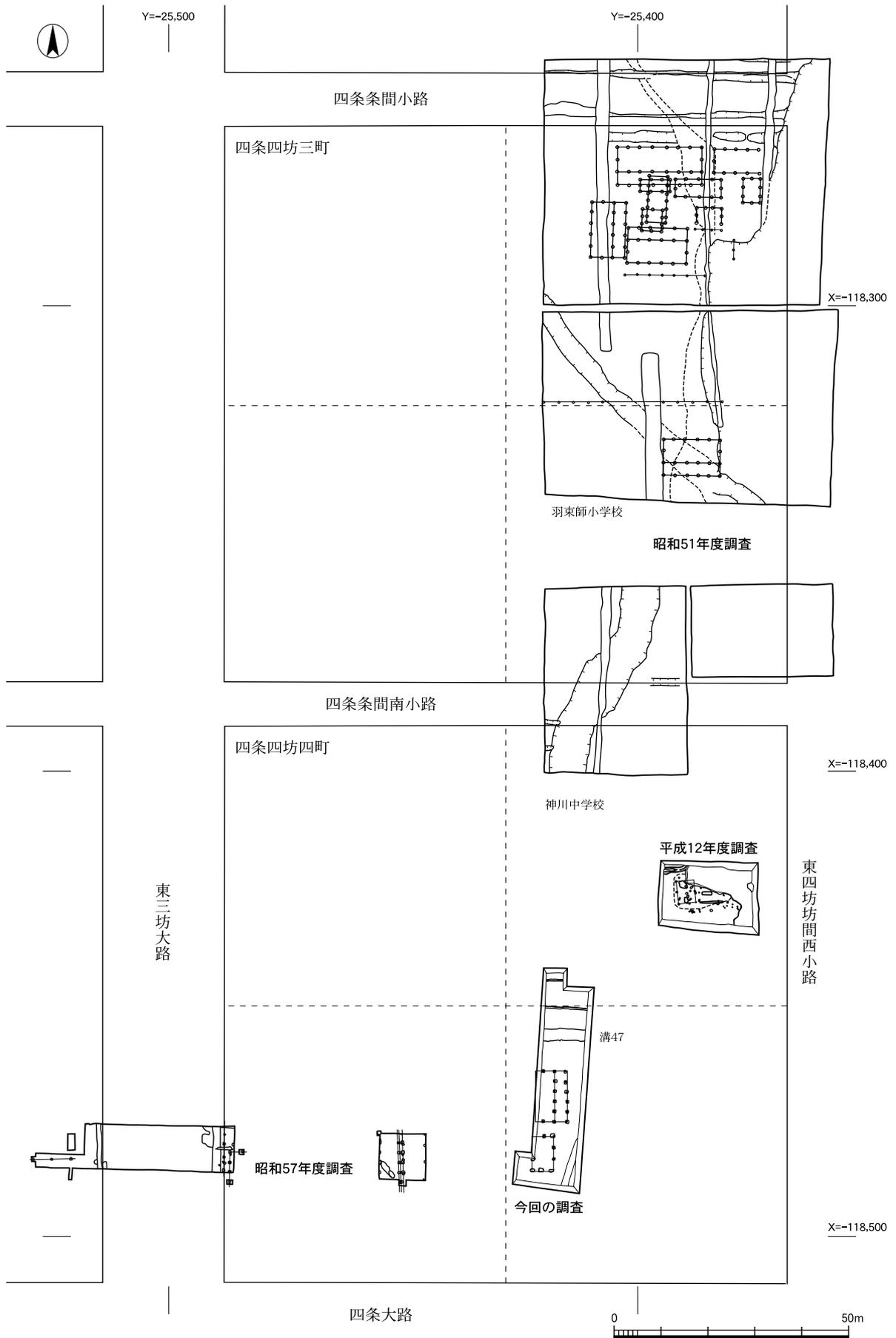


図 18 調査地点および周辺遺構配置図 (1 : 1,200)

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうあと・はづかしいせき							
書名	長岡京跡・羽束師遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-16							
編著者名	小松武彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 はづかしいせき 羽束師遺跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 はづかしひしかわちょう 羽束師菱川町 741 (かみかわちゅうがっこう) (神川中学校)	26100	3 1207	34度 55分 55秒	135度 43分 18秒	2010年12月 27日～2011 年3月11日	530m ²	校舎増築 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡 羽束師遺跡	都城跡	古墳時代	水田跡	須恵器				
	集落跡	奈良時代	水田跡					
		長岡京期	建物跡	土師器、須恵器、瓦、 土製品、木製品				
		平安時代	溝、耕作溝	土師器、須恵器、緑釉 陶器				
	室町時代	耕作溝	土師器、瓦器					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-16
長岡京跡・羽束師遺跡

発行日 2011年3月31日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961